

(写真①-3)



(写真①-4)



視野が狭くなるだけで、普通には歩けなくなる。「見える」と「見えづらい」では日常生活では大きな差になる。

② 全盲体験 (2017. 8. 25 金)

アイマスクをして、教室内・廊下・階段の歩行およびその補助を体験した。

位置関係を把握している校舎内であったが、教室内では机の位置が少し変化しただけでも大変であることを体験できた。(写真②-1) また、廊下の歩行時(写真②-2)に比べ、階段はかなりの恐怖心があったようだ。(写真②-3) 同時に、補助するには補助方法の知識だけでなく、責任感や信頼関係も必要であることを実感することができた。

また別日程であったが、素麺を調理後、アイマスクをして食べてみたり、介護補助として食べさせてみることも体験した。(写真②-4)

(写真②-1)



全盲状態では、イスに座るのもこわい。

(写真②-2)



補助法についての指導を受けながらの体験

(写真②-3)



階段の昇降の体験

(写真②-4)



全盲状態で素麺を食べ
てみる。(別日程)

③ 車イス体験（2017.9.27 水）

車イスの自走および補助を体験した。自走がいかに大変であるか、またスロープ（写真③-1, 2）や段差（写真③-3, 4）では補助のされ方によっては、大きな恐怖心があるかを体験することができた。全盲体験のときと同様に、補助するには知識が必要であることはもちろん、責任感や信頼関係も重要であることを実感することができた。

（写真③-1）



（写真③-2）



スロープ体験の様子。下り坂のときは、補助がないと非常に怖かったという感想が多かった。

（写真③-3）



（写真③-4）



段差体験の様子。小さな段差ですが、補助者がいると安心して乗り越えることができます。

6 主な成果

その都度アンケートを実施した。次のような感想が寄せられた。（可能な限りそのままの文章としました）。

① 弱視体験

- ・白内障の体験をしてみても、普段できているものも難しく、とても目が疲れた。実際にそういう人を見かけたら助けてあげたいと思った。
- ・目が見えないだけで、こんなに頭を使うんだと思いました。また、見えないから周りまで気づかたりして体力や精神的にも疲労しました。
- ・白内障という言葉は何度も聞いたことがありましたが、実際に体験してみると予想よりはるかに見えづらく、顔を近づけないと全く見えない文字もありました。
- ・視野が狭くなるとゆっくりでしか行動できなくなると知った。早く動こうとすると危ないのでゆっくりになってしまう。目の障がいをもっている人への対応は難しいと感じた。
- ・（普段メガネをかけていますが、）メガネをはずしたときよりも白内障のメガネをかけるといつもより見えにくかったです。視野が狭くなるメガネは足元が全く見えなくて大変でした。常にあの状態の人は大変だと思いました。

② 全盲体験

- ・誘導するとき、肘をつかませるだけじゃなく、声を掛けてあげるのも大切だと気づいた。
- ・（誘導するとき）一歩前を歩くことで安心させることができると思った。
- ・誘導者と全盲者は同じ考えでないと誘導できない。共通理解。
- ・他人の行動を責任もって誘導するのはとても緊張した。
- ・全盲体験では階段が怖かった。踏み外すのではないかと思いました。しかし、誘導の声掛けのおかげで安心して降りることができました。
- ・目が見えないと小さい音でもびっくりする。外で目が不自由な人を見つけたら大きな声で話しかけてびっくりされないようにしたいと思った。
- ・誘導するのもされるのも怖かった。全盲者の事を考えながら誘導しないといけないから。声掛けと配慮が大切だと思った。
- ・全盲体験は前に行った視野が狭くなる体験とは違い本当に全く何も見えないので、家で生活するならまだしも、外に出たときには周りの人の助けもかなり重要になってくると感じました。
- ・アイマスクをつけると何も見えなくて、廊下を歩くときはそうでもなかったのですが、階段を下るときは若干恐かったです。手すりがあると安心します。
- ・誘導する側は安心してもらえるように声を掛けながらじゃないといけない。
- ・誘導する側は責任があるので緊張した。逆にされる側は相手を信じきれないとこわいことがわかった。

③ 車イス体験

- ・下り道の時にスピードが出ると怖いと思った。車イスを押してもらっている人を信頼していないと怖いと思った。
- ・介護者と障がい者とのコミュニケーションが必要になる。介護してくれる人がいるありがたさ。自走は大変だった。
- ・車イスを押すときにゆっくりすることが大切だと思った。押されているときは下りが意外に怖くなかった。
- ・下り坂は乗っているときすぐに止まれない恐怖があって、ブレーキを引いても押す側でもなかなか止まるまでに時間がかかることがわかりました。もし人を乗せるときは安全に注意して動かしたいです。
- ・車イスを押す側だと乗っている側に安心して乗ってもらうために工夫が大切だと思いました。

以上のように、障がいを抱えた方がどう大変であるかだけでなく、外出などの際に補助者・介護者がいることで安心できるということがわかったという感想が多かった。また、自信をもって補助するには知識・技術が必要なことはもちろんであるが、補助される側との信頼関係が重要であるということがわかってもらえたようである。

7実践において工夫した点 (事業の特色)	<p>弱視体験用のメガネは視覚支援学校から借用した。今年度は「生活と福祉」の授業選択者が少ないこともあり、弱視・全盲体験ともに、全員にいろいろな作業をやらせることによって、普段の生活にどのような影響があるのかを考えさせるようにした。</p> <p>車イス体験は、利府高校が坂の上にあることから、かえって学校付近では車イス利用者は見かけない。しかし、オリンピックサッカー会場となるグランドイ21には多くのスロープもあることから、車イスの台数を確保し、校地内にあるスロープを利用して全員に体験させるようにした。</p>
8主な課題等	<p>家庭科「生活と福祉」の授業の一環として実施したことから、補助者・介護者の育成という点では目標を達成できたが、対象の人数が少なく、広がりに欠けた。全校行事である文化祭において、来客者への車イス体験の実施も考えたが、授業の進度と合致せず、そちらは保健委員会が中心となって実施した。</p> <p>また、本事業の目的を考えれば、すぐに補助者・介護者のボランティアがオリンピック・パラリンピックで必要になるということをもっとPRしてもよかった。</p>
9来年度以降の実施予定	<p>このような体験をすることにより、補助者・介護者の必要性を実感してもらえる。選択授業ではあるが、選択してくれた生徒には可能な限り全員にこのような体験をさせる授業を継続したい。</p>